

アカシア夜話 アカシアンナイト 第13話 (40回生の疎開と被爆)



昭和20年(1945年)、戦局は悪化し、広島市内の中学1、2年生は建物疎開へと駆り出されていました。附中では、市内での危険な作業を避け、農村動員させようと教員や父兄が奔走、7月になって賀茂郡原村(現 東広島市八本松町原)、豊田郡戸野村(現 東広島市河内町戸野)、宇山(現 東広島市河内町宇山)へと生徒を疎開させます。

そして昭和20年8月6日、広島市内で建物疎開の作業に取り掛かろうとしていた他校の中学1、2年生の頭上に原子爆弾が炸裂したのです。実に5,900人も生徒たちが亡くなり、全滅した中学校もありました。

一方附中の被害は、学校に残り授業を受けていた科学学級の生徒や、事情で疎開に行かなかった生徒など数十名にとどまりました。多くの附中の生徒が教員や父兄の尽力で原爆に遭わずにすんだことに感謝すると同時に、同じように未来に夢を持っているながら亡くなった中学生のことを忘れてはならないでしょう。

今回、たまたま疎開先から帰省中に被爆、全身火傷を負いながらも復帰された古川浩さん(40回)にお話を伺いました。古川さんは昭和18年(1943年)4月附中に入学されましたが、体調を崩され休学。昭和19年(1944年)、再度1年生として復学。級友と宇山へ疎開中でしたが、8月、医師の診察を受けるため帰広されてきました。

昭和18~19

甲斐：私たちが想像している附属とは当時はずいぶん違うようですが、入学当時の学校の雰囲気はいかがでしたか。古川：昭和17年6月のミッドウェー海戦の敗北は天王山で、日本は終戦に向かって追い込まれていました。18年2月にはガダルカナルから撤退、5月にはアッツ島玉砕でしたが、敗けているとは国民には全く知らされていなくて、皆、勝てると思っていました。だから附中でも軍事教育が行われていたのです。軍人勅諭を自分で書いて、それから公民(以前は修身現在は道徳)の時間に、それをずーっと読むわけ。軍事教練も時間割にあって、3年生から銃を持たされていました。岡田：3年生というと14、15歳ですね。古：教育が、頭からね、洗脳されているから。もう。お国のためにと心から思っ

てやっていました。日本は精神的には強いんだけど、とにかく物資がない。勝てるはずはなかったのですが、その時は知りませんでした。同級生でも、陸幼(陸軍幼年学校)、予科練(海軍飛行予科練習生)に合格して移って行っ

た方もありました。そうやって若い人が戦争に駆り出されていました。

学校では上級生が幅を利かせていて、放課後全員を雨天体操場に集め説教が行われました。通学の途中で教官、上級生に会うと敬礼せにゃいけん。「お前らの中に欠礼したやつがおるじゃろう！前に出てこい！」と。自分が知らずに欠礼しとるかもわからん者は前に出るんですが、出ると殴られる。甲：「通学に電車を使ったやつがおるから、前に出る」とか、「県女の前を通ったやつは前に出る」とか。古：妹を連れて歩いとったら、「女性を連れて歩いとったじゃろう」とか。岡：日本全体がそういう雰囲気だったのでしょうか。甲：附属はまだましな方だったのではないですか。

古：そう、割合民主的な先生はおられたね。英語は敵国語だからダメだったけれど、附属では授業がありました。ニュース映画は見に行けたし、ボートも上級生となら乗れました。音楽の時間は、敵機の音をドレミファで何音かという聞き分けをやっていました。甲：行事はどうですか。古：昭和18年には月1回全員で護国神社に参拝し、また、室積の臨海学校へはラッパを吹いて行進しながら行きましたよ。それが最後の臨海でした。文理大から小学校まで全体でやる運動会があって、私はそれに出たけれど、それも昭和19年にはもうなくなりました。

学徒動員

甲：広島にも空襲があったのですか。古：ありました。私は学校から2キロ以内に住んでいたから、防空要員で、学校を守るため、空襲警報の度に学校に駆けつけました。夜中じゃろうと、早朝じゃろうと。ある時、袋町の方からB25(重爆撃機)がバラバラッと爆弾を落としていって、学園内にも一発落ちました。古い講堂が爆風で押し倒されて、留学生が1名亡くなりました。夜中に駆けつけた時には、呉空襲で、附属の門のところから見ると、真っ黒い手前の山の向こうの空が真っ赤になっていました。

昭和19年になると学徒動員令が布かれ、太田川の氾濫で可部の寺に分宿し田圃の川砂を除くのが最初の労働でした。上級生は三菱などの工場へ勤労奉仕に出ていました。2年の時は沼田の農家に2人ずつ分宿し麦刈りしたり、瀬野で稲刈りしたり、工兵橋のところで馬の餌を運んだり、文理大の図書を祇園の教会に疎開させる手伝いをしたりしました。その時、ご苦労さんと出された江波だんごは糞臭い気がしてよう食べんかった思い出があります。八本松のゴルフコースの開



P r o f i l e

古川 浩氏(40回) 略歴

- 1954年 3月 慶應義塾大学経済学部 卒業
- 同年 4月 プリンズ自動車販売(株) 入社
- 1958年 8月 プリンズ自動車販売(株) 退社
- 1959年 1月 山陽商事(有) (現 山陽不動産(有))入社
- 1974年 6月 (有)新宝商邦 入社
- 2005年 9月 から現在も広島県赤十字有功会副会長
- 2007年12月 山陽不動産(有)退社
- 現在 (有)新宝商邦 代表取締役会長

墾もしたんですよ。

甲：そのころには授業は全くなかったのですか。古：なかった。分散してあちこち行っているから。広島他の中学生は市内の建物疎開に動員されて、危険な作業をしているところが多かったけれど、附属は先生が配慮して、疎開を兼ねて分散させていました。宮井：生徒を守ろうといういろいろ交渉されたのですか。

古：そうそう。そして、戸野村、宇山へ疎開しました。甲：疎開生活はどんなでしたか。

古：私たち東組と南組は、宇山で貯水池の土手を作る工事などをしました。私は集団生活で蚊や蚤にやられ、傷が化膿して作業ができなくなったので、山に藜(あかざ)とか藨(ふき)とかを探しに行きました。病人が探すのだから、ろくに集まらない。それで味噌汁を作るけど、草が浮いとるだけよね。それとご飯だけ。だから栄養失調になるし、治らない。そうして動けなくなった者が、山へ行く。甲：動ける者は作業をする。宮：調子が悪くても、寝てていいよというわけじゃなかったのですか。古：もうあの頃はね。みな、ギリギリでした。戸野村に疎開した北組は、修身の先生が厳しくて衝突していました。とうとう、集団で脱走事件を起こしてしまいました。

結局私は体調がよくなり、一度診察を受けよと言われて、広島にもどりました。

被爆

甲：たまたま帰広されていたのですね。どちらで被爆されたのですか。

古：帰広中に校庭の菜園の様子を見ておくように言われていたので、8月6日朝、舟入の自宅を出て、千田町の学校に向かって歩いていて、ピカッと光りました。マグネシウムを焚いたような光。そして次の瞬間、体がふわーっと上がって、15mくらい飛ばされました。あの頃は訓練をしていたから、すぐ道路へ伏せました。体の左側に熱湯を吹きかけられたような痛みがあって、熱いので払いのけたらずるっと皮が剥けて。起き上がれずうつぶせていると、市の中心部の方から、バリバリと音を立てて建物が倒れていきました。音がダーッと通り過ぎて行って、砂煙が上がりました。

なんとか家にたどり着き、倒れこみました。帽子や教練手帳、生徒手帳はわからなくなっていました。母に服を探しにってもらいましたが、焼けた切れ端しか見つかりませんでした。

舟入の自宅に火が回ってきたのは2時半頃、舟入病院から火が出て、病院の建物がこっちへ倒れこんでいるから、全部燃えてしまった。危ないから河原に降りていましたが、敵機がくるというので、また上がって防空壕に入りました。もう私は寝とるだけになりました。火傷の跡が化膿して、じゅくじゅくと垂れてきたのを、毎日母が拭き取ってくれて、石路(つわぶき)の葉を貼ってくれました。石路は膿を取ると言ってね。赤チンを塗った人は表面は治るんだけど、中の膿がひ



どくて死んだ人が多かった。下痢も続きましたが、助かったのは母のおかげかな。
甲：ずいぶん爆心に近いですね。よく助かりましたね。**古**：1.5kmですからね。生き残ったのはたまたまでしょう。近所の方と一緒に焼け跡で暮らしましたが、毎日火傷がなくても突然亡くなってしまふ方が多く、死への恐怖心もなく何時自分が死ぬのかなあと心の中で思う状態でした。

甲：40回生には被爆死された方はいらっしやらないのですか。**古**：永井(卓爾)君が爆死しました。疎開しなかったのが何人かいるのですよ。彼は自宅で亡られたのじゃないかな。あと疎開に行かなかった連中と41回生の数名が、南門をちょっと出たところで被爆して、家の下敷きになっています。農園に行くいうて、歩いて行きよったらしい。10名くらい広島に残っていました。**宮**：それでもほとんど疎開されていたから、附属は亡くなられた方が少ないということですね。**古**：他校に比べたらね。いろいろ先生の配慮があるのだけど、実質的には南組のある父兄が、手配してくれたということのようです。**甲**：附属の父兄はやはり顔が広がったから、疎開できたのですね。

終戦後

甲：学校に復帰されたのはいつ頃ですか。

古：附中が原村の兵舎で再開して、そこへ復帰しました。**岡**：体がよくなってからいかれたのですか。**古**：秋くらいから汽車で通いました。原村では、原因が何だったか今思い出せないのですが、当時3年生主導でストライキがあり、後日参加者全員が始末書を書かされました。しばらくして、吉土実町(現 東広島市西条町土与丸)の国民学校跡を貸していただけることになり、そちらへ移りました。そこでサッカーを始めました。

甲：附属は昭和22年(1947年)の全国大会で優勝しましたね。**古**：全国大会(お米持参です)では決勝で尼崎中に1点取られただけで、圧勝でした。フォワードに

長沼健さん(39回)達がいって、本当に強かった。私は附小のくじで落ちて、小2で齊美小から附属に編入、長沼さんも一緒に袋町小から同じクラスに編入したのですよ。

甲：戦争が終わって学校教育も変わりましたか。**古**：戦中とは一変して、民主主義の教育になりました。この軍事教育と民主主義の教育の両方を受けたことが、私にとってとても大きなことでした。先生も軍国主義の教育をしとったのに、一日にして民主主義に変わって、どうして授業をしたらいいかわからんような状態でした。

その後学校制度は6・3・3制に変わり、私たちは中学5年生から高校Ⅱ年生に変更になりました。そのどさくさで、私たちは中学の卒業証書ももらっていません。学校は、私らが中学を出たら中学が共学になり、高校を出たら高校が共学になった。私が切り盛りをしたのだけど、戦後第1回の中高の大運動会を男女一緒にやりました。

同級生に聞くと、1年生の時のことが一番覚えていると言います。たまたまその時代に生まれたのですが、戦争、被爆、戦後と本当に激動の中学時代でした。

編集を終えて

インタビューの後、日赤の活動に尽力されたことや、アカシア会の会計を立ち上げられたこと、80周年の行事をされたことなど、楽しく伺いました。

古川さんは、予備役士官だったお父様も年限ぎりぎりで召集されてフィリピンのパターン半島で戦死され、ご自身も、戦争に翻弄された少年時代を送られました。軍事教育から民主主義教育へと教育の転換を経験され、平和に対して強い気持ちを持つようになったとおっしゃいました。お話をお聞きして、時代を生き抜いてこられた大先輩に、只々恐れ入りました。

今の平和な日本、そして附属が先輩方の努力のもとにあることを若い皆さんに伝えていきたいと思いました。

編集：岡田美香(76回)
編集：宮井ふみ子(76回)
文責：甲斐 稔(63回)



TATESHIBA
General Engineering

〒733-0002
広島市西区楠木町2丁目4番3号
株式会社 立 芝
向井 恒雄(50回卒)

TEL (082)230-3711
FAX (082)237-7222
HTTP://www.tateshiba.co.jp